

# 研究通信

№ 3 1

1959.4発行  
村落社会研究会  
事務局

東京都文京区小石川町  
1の1  
中央大学文学部  
社会学研究室内

## 共同調査と村研支部組織

前号事務局提案に対して

(仙台) 塚本哲人

村研第一回大会が開かれた農学研究所の建物をななめに眺めるこの研究室にいと、すでにここ仙台に数年間も住んでいるような気持ちにとられます。しかし、この地にやつてきてから、まだ四ヶ月余にしかありません。新事務局が前号の研究通信で提案した「支部組織の確立や地区別研究会の定期的開催」ということに關して何かいえとの御注文ですが、このところ数年間、内地のムラの勉強から遠のいていたためもあつて、まとまつた意見をもつていたつておりません。そこで、ここでは、村入りしたばかりの新参者が仙台で感じたことを二つ三つ列挙させていただきだけ、おゆるしいたきたいと思ひます。

昨夏から当地在住の、村研会員は、数班に分かれて、北上川流域の調査をつづけてきました。この調査は、日本文科学会、昭和三三年度調査として立案実施されたもので、村研の活動とは直接の關係は全くないわけですが、実際には、当地の村研会員がほとんど全部参加し、それぞれここ数年來手にかけてきた基盤にたつて共同

調査研究を行つたものでした。支部組織の確立というふうないい方をする、何となくぎくしゃくしてしまふ。しかし、卒直にいつて、このような共同調査研究が、地区会員の全体によつて実行される、きわめて自然的に地域的協業組織がつくられてしまふように思ひます。勿論、それには、それなりの基礎がなければならなかつたし、当地にはその基礎があつたということでしょうが、村研会員による、共同調査研究の実施は、地方的組織の強化と密接不可分の關係にあると感じ入つてゐる次第です。

昨日、十四日に、渡敗される中村吉治先生、愛知大学へ赴任する経済史の村長さん、東洋大学へ転任する社会学の藤木さんの歡送をかねて、右の共同調査の最終的打合せの会がひらがれました。その席上、木下彰先生は、この調査がスムーズに実行されたのは、参加者が村研会員であつたことを指摘され、ここに出來た共同研究の組織を今後もつづけてゆくべきことを力説されました。これは全員の氣持であるといえましょう。問題は、全員を参加させるだけの物的基礎にあるのでしょうか、北上川流域の共同調査によつて確立された方向において、当地の村研活動が展開されてゆくことを願つてゐます。それは、最も自然的な、正当的な道であると考えられるからです。

しかしながら、この道を手ばなしで主張するだけでは、充分でないことを感じてゐます。というのは、この共同調査の報告書作成にいつての打合せでも問題になつたことですが、最も手近いところでいうならば、私達社会学の側における無意味無内容的な言葉の多用という問題があると思ひます。共同の仕事をしていくとき、こんな問題が、どれだけ進歩の障害になるものか、当地の社会学の側の会員は、よくよく知らされてゐるようによつて思ひます。術語に対して敏感になつて、才一義的な相互伝達の場を少しも広げてゆきたいと思ひます。その努力をおこたるならば、共同調査研究の累年の実施も、決して私達の側にプラスにはならないのではなからうか、といつた反省が生れてゐると思ひます。地域的な村研会員の協同研

私は、案外にきわめて手近な問題の克服に努力目標があり、そこに存在意義があるという考え方であります。昨秋の鴨子大会でかなり明確にされたように、ムラの問題に対する基本的な捉え方の相違について、私達は大上段の討論においてではなく、もつと日常的な濃密な接触のなから、解決への糸口を自らの努力によつて求めてゆくことにしなければならぬし、そのための共同調査研究のつみかさねをこの地域で試みたいと念じているわけです。

それについても、私達の側で一応独自のつくられたものが何もないならば、右のことも空想に終つてしまひそうです。当地には、あの煙山調査を通じて獲得された自信が、その関係者の方々にはつくられています。その自信は、私達に対して、色々の教示を与えてくれているようです。社会学の側の若い会員も、ぼつりぼつりと、自分のものをつくり、これを土台に、ものをいおうとしています。

煙山調査をはじめとする長期間にわたる調査の成果から生れた自信とは、或いはほど近いものだとしても、それをひとつの目標とする歩みとみてはいけなからうか。そして、この状態は、漸く、この地の村研究会員の地域的交流が、板についてくる要件ができてくるとみることができないでしようか。

私達は許される範囲内で、共同調査研究がつづけられてゆくことを願っています。その過程では、どんな小さな問題も、ゆるがせにしないで談笑的に解決してゆくことにしたいと念じています。自分のものを出して、それからよりよいものを得たいと考えています。こうした活動が、村研と何らかの糸で結ばれているならば、村研の活動に組み入れられてゆくならば、それが最もよいと思つています。